
初めての気持ち

ちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めての気持ち

【Nコード】

N9546A

【作者名】

ちい

【あらすじ】

ある日、コナンは博士の家に行った。しかし、あいにく博士は外出中で、哀しかなかった。そこで哀とコナンは…

（前書き）

一部だけ修正しました。ほとんど変わってないと思います汗汗

誤字発見したので、修正しました。申し訳ないです／＼（7／8）

「私、このままでいたい。あなたといっしょに、ずっと、ずっと。」
パチ。

コナンは急に目を覚ました。

何か、夢を見ていたような気がするが、上手く思い出せない。確か、灰原が出てきたような……。まあ、夢はただの夢。忘れてもどうってことはない。時計を見ると午前4時。

「んだよ。まだこんな時間じゃねえか。もう一眠りするか。」
そう言っつて、コナンは眠りに落ちた。

「コナン君、朝よー。」

蘭の声で目が覚めた。

「うわ、もう9時じゃねえか。寝すぎちゃった。」

コナンは着替えて下へ降りた。
ガチャ。

「おはよう、蘭姉ちゃん。」

「おはよう、コナン君。今日はずいぶん遅かったわね。」

「昨日遊びすぎて疲れちゃって。」

適当に都合のいいことを言っておく。

「あれ？おじさんは？」

「ああ、お父さんなら、町内の人と出かけたわよ。あ、さっき博士から電話があつてね、コナン君に用事があるから来てくれ。って言われたわよ。コナン君まだ寝てるって言ったら、急いでないから、今日中ならいつでもいいだつて。」

「うん、わかった。ありがとう蘭姉ちゃん。」

コナンは朝食を済ますと早速出かけた。

「蘭姉ちゃん、博士のところに行ってくるね。」

「行つてらっしゃい。気をつけてね。」
「はい。行つてきます。」

博士の家の前

ピンポン。

チャイムを鳴らす。

ガチャ。

「はい。…あら、工藤君。いらっしゃい。どうしたの？」
「…。」

「工藤君？」

「ん、あ、ああ。」

コナンは、なぜだか分からないが、哀を見た瞬間、今まで感じたことのないような、不思議な気持ちになっていた。

「どうしたの？」

哀が顔を覗き込んできた。なぜか胸がドキドキする。

「…、あ、いや、博士から電話があつて、来てくれ。って。」

「そう。でも、博士出かけちゃったわよ。…、そんなに遅くならな
いって言つてたから、待つてる？」

「ああ。そうするよ。」

コナンは、なぜさつきから哀に対して変な気持ちになり、ドキドキするのかわからなかった。二人は特に話すこともないので、それぞれ推理小説とファッション誌を読んでいる。ふいに、哀が声をかけた。

「博士、まだ帰つてこないわね。お茶でも、飲む？」

「ああ、そうだな。頼むよ。」

数分後、紅茶にクッキーを添えて、哀が戻ってくる。

「はい。」

「サンキュ。」

哀は、コナンの前に紅茶を置くと、なぜかいつも座るコナンの向かい側ではなく、コナンの隣に座った。コナンの心臓は、さらに速く

なった。

「ねえ、工藤君。私、考えていたことがあるの。」

哀が言った。

「何だよ？」

「私、このままでいたい。あなたといっしょに、ずっと、ずっと。」

「コナンははっとした。これだ。俺は今日、夢の中で灰原に同じことを言われた。そうだ。だから俺は今日、灰原にこんなにドキドキして。」

「灰…原？」

「私、工藤君のことが好き。だけど、私たちが元の姿に戻ったら、あなたは、絶対にあの子のところへ行ってしまうわよね。だから、私は元に戻りたくないし、あなたにも戻ってほしくない。あなたがなくなったら、私、ここで生きている意味ないもの。だから。」
哀の顔が、コナンに近づいてくる。コナンはどうしたらいいかわからず、固まっている。哀の顔がすぐそばまで来た。そして、哀は言った。

「だったらどうする？…冗談よ、冗談。」

コナンは、そのまま哀を引き寄せたい衝動に駆られた。しかし、その気持ちを抑え、

「まったく、お前結構良くそういうのやるよな。」

「あら悪い？だって暇だったでしょ。ちょうどいい暇つぶしになったと思うけど。」

「かわいくねーやつ。」

「あら、ありがと。」

その後、2人は無言でお茶を飲んだ。

「片付けてくるわね。」

コナンが飲み終えたのを見ると、哀が言った。コナンは、とりあえず、推理小説の続きを読もうと、本を開いた。と、その時。
ガチャン。

キッチンの方で何かが割れる音がしたのだ。コナンは慌ててキッチンへ向かった。

「灰原!!どうしたんだ!?!」

「あ、ごめんなさい。ちよっと手が滑っちゃって。」

哀が手を滑らせて、コップを割ってしまったのだ。

「ったく、気をつけるよな。」

そう言つて割れた破片を拾い出した。

「いいわよ。私が割ったんだから。」

そう言つて哀も拾い出す。

「俺が拾うからオメーは向こう座ってる。破片が指に刺さったらどうすんだ。」

コナンは哀を静止しようとした。その時、コナンの手が哀の手に触れた。2人が一瞬止まる。

「あつ。」

同時に声を上げる。

「や、休んでろつて。冷静なオメーがコップを落とすなんて、体調が悪いか、何か考え事してたと思えねーからよ。」

全く、この探偵さんには何でも分かっちゃうんだから。かなわないわ。――哀はそう思つて、

「そうね。じゃあ、ありがたくあなたの言葉に甘えさせてもらおうかしら。ここで待ってるわ。」

しばらく無言で破片を集めるコナン。しかし、唐突に口を開いて、言つた。

「なあ、灰原。」

「何?」

「あのさあ、俺、今わかんねーんだよ。」

「え?」

「俺、自分の気持ち、わかんねーんだよ。この姿になって、蘭の気持ち知つたし、それに、お前の気持ちも知ってたんだ。でも、俺の気持ち、わかんねーんだ。探偵なのに、こんなこともわかんねー」

んだぜ。笑っちゃうよな。」

コナンはそこで一呼吸おき、続けた。

「お前、さっき言った事、冗談なんかじゃねーんだろ？」

「…、何のこと？」

「さつき、お前が言った事だよ。うそじゃねーんだろ？」

「そんなわけないじゃない。冗談といったら冗談よ。」

「本当に本当か？」

コナンは、まっすぐ哀を見て言った。哀は、そのまなざしから、少し目をそらして言った。

「冗談じゃなかったら、どうするの？」

「だから…な、俺、まだわかんねーんだよ。俺、お前の事、好き、かもしれねえ。けど、それが本当かどうかもわかんねーんだ。だからな、」

「もう、いいわよ。」

哀がコナンの話をさえぎった。

「あなたが、あの子のこと好きなことくらい、わかってたもの。少なくとも、私はずっとそう思ってた。私のことなんて、なんとも思われていないと思ってた。あなたの口から、分らないなんて、聞くと思つてなかったわ。私、今すごく驚いてるのよ。これがどんな気持ちかわかる？」

哀はそう言つて、コナンの方を向いた。コナンが哀の顔を見ると、哀はにつこり笑っている。コナンは、それが嘘の笑顔でないことがわかった。

「じゃあ、待つてくれるか？俺の気持ちが決まるまで。」

「ええ。」

「サンキュ。」

コナン残りのかけらを集め始めた。しばらくしてからボソツと言つた。

「素直にしてたらかわいいのによ。」

「え、何か言つた？」

「何でもねーよ。」

しかし、哀には聞こえていた。

「やっぱり、一緒に拾うわ。」

哀はそう言っで、コナンの横に並んで拾い始めた。今までにない、いい表情をして。コナンはそんな哀の方を時々見ている。

「ただいま。哀君、遅くなってスマンのお。お、新一君も来ておるのか？」

博士が帰ってきた。

「おかえりなさい。」

2人は声を揃えて言った。キツチンは綺麗に片付いていた。

（後書き）

呼んでくださった方、ありがとうございました。初めて書いたので、取るに足らない話だと思いますが、これからも書いていきたいと思っています。だから、皆様に評価していただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9546a/>

初めての気持ち

2011年1月22日14時56分発行